FRONT
OF
VIEW

鎌倉ウォーキング

ライフデザイン研究所　代表取締役社長
山ノ井 清蔵

横浜に居を構えてから4半世紀が過ぎた。母が健在でまだ娘達も小さかった頃、段葛から鶴岡八幡宮へと歩いて花見に行ったことや、時々美術館を覗く程度で鎌倉とはあまり縁が無かったし意識したこともなかった。しかしある時、車で美術館に立ち寄り、あまりに天気がよいので瑞泉寺まで一人でぶらぶらと歩いてみた。数カ月後、今度は相国寺から釈迦堂切通し方面を歩いた。開花のシーズンに合わせたわけではないので人の少ない鎌倉だったがその後妙に気になる存在になった。鎌倉は関西の古都と比べると地味すぎる。鎌倉を象徴するものは鶴岡八幡宮と長谷の大仏で、武家の町だったため質実剛健そのもので華が少ない。武家政治を司った大蔵幕府跡は石碑が立っているだけで往時を偲ばせるものは皆無である。建長寺や円覚寺の名前は知ってはいるものの境内に入った記憶が無い。

鎌倉時代140余年のうち源氏については少し知識があっても北条一族には馴染みが乏しい私にとっては「北条時宗」の放映が始まったのもタイミングが良かった。一寸したきっかけから月に1、2度一人でぶらりと電車に乗って鎌倉詣でをするようになった。鎌倉は我が家から近くまた規模もほどほどで良い。そこで鎌倉詣でをこれからの楽しみの一つに加えようと思っていて色々な効用を期待している。

まずは勿論歩く目的のためである。ゴルフも歩くという点では同じだが、一人歩きは朝早く起きて家を出るとか決められた時間までに集合するとかの制約が無く、天候次第でぶらりと午後からでも出かけられるという安直さが実に好ましい。午前に家を出れば昼食は外食で済ませ妻の手を煩わせることもない。ウォーキングは高齢者の趣味として上位にランクされている。どうやらいくら歩いても足の筋力強化には役立たないようだが、屋外を歩くのは気持ちが晴れ晴れするものである。

二つには関西の名刹、庭園などに親しむきっかけとしたい。そのためには鎌

倉という古都とその時代を勉強しておきたい。

三つには実は当初から狙ったわけではないのだが結果として趣味の面で妻へ歩み寄りが図れそうなことである。妻は園芸が趣味でこれまで何度も花のベストシーズンに鎌倉を訪れている。6月は東慶寺の岩煙草や紫陽花、秋には宝戒寺の萩といった具合に季節季節に色々な花々を一緒に鑑賞する機会もあるだろうし、それぞれ別々に行っても夫婦二人の夕食時の格好な話題提供ともなればこれはなかなか良い趣味が加わるといえよう。夕食時会話が途絶える夫婦も少なくないようだ。今は花の名前も殆ど知らない上、猫の額ほどの庭への散水一つ手伝わないが、将来的にはどう変化するかこれからの見物ではある。

当研究所では本来業務の研究、調査に加え、官庁や一般企業の定年退職予定者向けにヘルス、タイム、マネーの3本柱でセミナーを実施しているが、大橋巨泉著「人生の選択」では生きる上での優先順位として第一にヘルス、二番目には新たな項目としてパートナーを付け加え、その後タイム、マネーの順としていた。確かに子供が育ち会社を離れる後半の人生では遅ればせとはいえパートナーとの上手な関係の構築には一段と気を配ることが肝要かと得心している。

今月掲載の2レポートとも家族に関する調査研究である。当ファミリーは長女が子育て中、20歳代後半の次女は親子の考えが一致し今春スムースに独立、そして親は夫婦二人の生活をスタートさせたので興味深く手にした。北村研究員のテーマは「成人未婚者の離家と親子関係」である。山田昌弘氏によると、親と同居する成人未婚者（パラサイト・シングル）の増大については、その親に寄生される「意志」と「能力」の双方が必要との指摘がなされ、ネーミングの妙もあって話題を呼んだ。欧米では20歳位になると親元から自立するのが原則の社会と聞くが、北村研究員は海外でも例を見ないこの現象について、同居している子側にアンケートを実施しその実態を調査している。ここでは物言わぬ親の存在が印象的だが、離家がどこまで自立の指標とみなせるかなどさらなる調査の展開に期待したい。松田副主任研究員は「インフォーマル・ネットワークとwell-being」である。具体的には母親の不安やストレスとして社会問題となっている育児をテーマとして取り上げ、育児ネットワークが母親の心の安寧に与える効果を精緻な手法で分析しており、本号（上）では理論の枠組みと育児ネットワークの実証分析を行っている。いずれも生活関連調査を標榜する当研究所ならではの成果といえよう。